

PHD LETTER

49

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1993・12

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 研修生レポート総勢12人ノ 4・5・6P
- スマトラツアーレポート 3P

発行:財団法人PHD協会

編集人:草地 賢一

住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202

TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867

郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会

定 価:100円



インドネシア スマトラ西州にて
撮影/山本佐一郎

赤道直下
カンカン照りの空の下
大魚の小魚を干す作業
子どもはお母さんのお手伝い
輝く笑顔はもうひとつの太陽だ

草の根の人々を訪ねて

8月9日から16日までフィリピンを訪ねました。業務の第一は毎年研修生が、「地域組織化」の実習をさせてもらうガバルドン村の草の根ヘルスワーカー、ヨリーさんの日本における短期研修の最終打合せとその出国を援助することでした。第二はネグロス、オリガオ村に帰った三人の青年達のフォローおよびスタディツアーの今後の展開に関する調整でした。この旅行には埼玉の高校生と、マニラのフィリピン大学大学院で「開発のあり方」を研究している二人の大学院生が同行しました。

ヨリーさんの出国は、在マニラ日本大使館領事のご高配を得てスムーズに実現しました。最近「在留資格認定証明書」を持っていても厳しい審査を経なければならぬ程、相変わらず日本への入国は困難を極めているようです。

昨年秋からマニラに出稼ぎにきているジャネットさん(9期生)に会いました。兄妹が多い一家の長女として少しでも家計を援助しようとマニラに来た彼女は数カ月の職探しの後やっとデパートの売り子の職を得ましたが、収入は自分の生活を維持するのが精一杯。とても家計援助まで手が回らないとの事でした。私達もこれを何とか解決し、日本で得た衛生、栄養、保健の知識をオリガオで活かして欲しいと考え、本人とオリガオの人々と話し合いました。PHDとしては例外的にオリガオの人々に資金援助をし彼女が村人のために働けるよう一応一年間に限って応援することにしました。

今年3月に西ネグロス農業大学を卒業

したドミー君(7期生)は村に帰り大変張り切っていました。6月にはネストール君(8期生)やヘススさんたちと「KRISMA」という村人だけのグループ(P.O.=Peoples Organization)を結成し、きちんと政府にも登録した農村開発団体を発足させていました。この団体が農民の自立を達成できるよう、PHDはスタディツアーのあり方を含め新たな思いでカウンターパートとしての関係を確認しました。

8月16日マニラ空港で第7回スマトラスタディツアーの一行と合流しました。九州から静岡までの範囲で、また10才から70才までの年齢の参加者構成。ほとんどがホストファミリーとして、また研修指導者として帰国した青年達に関わりの



ある人でした。西スマトラ、パダン空港での船田さんとエニさんの写真が物語るように感動的な再会をした人が多くいました。例年のようにシャリフ・アリ先生の手配で州知事、市長を表敬訪問し、ユリ君(4期生)を始めとする8人の帰国研修生が、各々献身的に私達を迎えてくれました。

地道に成果をあげる元研修生

ユリ君は昨年10月台湾、高雄でリフレッシュ研修を経て地道に州政府漁業振興部で、アフナル君(6期生)はブンハッタ大学日本語科で、ファイジン君、ペディ君(6期生)はアイルバンギス村でそれぞれの課題に取り組んでいました。アリ君(5期生)は体調をこわしていましたが、サムスアリス君(8期生)、ヤニさん、エニさん(10期生)は元気でパシルバルー村で頑張っています。今年4月に村へ帰った二人の女性は対象的な動きをしていました。ヤニさんは村で何か始めるための本人の生活基盤づくりを第一にし、かつ日本で得た知識を再度インドネシア語の文献に当たりながら整理をする準備をしていました。エニさんは非常に実践的でまず自分の家にデモンストレーション用にトイレを作り、続いてしばらく休園していた村の幼稚園を再開させ、恒久的に政府の支援を得ていくよう動いていました。

私はアイルバンギス村にもこのような女性が元気を得る動きを期待し、ルディア・エリタさんを来年の研修生として選びました。

また3度目のフォローアップに訪れて下さった山本佐一郎さんの指導は極めて明快で具体的に網のよじれを防ぐロープの使い方の説明をされました。

スタディツアーの参加者は帰国した青年のフォローアップの様子、新研修生の選考などPHDの国際協力の現場を具体的に理解しつつ同時に戦跡を巡り、歴史の学習もし、8月26日に一行は日本へ、私はオーストラリアへ飛び立ったのでした。

総主事 草地賢一

内山信子(北九州市 主婦)

楽しみな西日本研修 年一回の集いから

九州とは言え、この北九州は山陰の気候に似て冬は季節風の吹く寒い所、その厳しい季節にPHDの研修生との出会いが繰り返されてもう8年になります。

マザーテレサの話の聴いた女性達が自分達にできることはないだろうか、インドに教育資金を送ることから始まった「アジアを考える会」との交流は、絶えず多くの課題を与えられながら、静かに地域に根付きつつあります。当初は会員20名程度の集会でしたが地域の祝町小学校の交流をはじめとしてその母親達との出会い、また地域への拡がり、少しずつ理解を深めつつあります。ホームステイを引き受けて下さる家庭の確保からはじめられた研修生とのふれあいは、特に子供達の心に大きな国際交流の種を蒔いています。毎

年冬の出会いを楽しみに、給食を共にし、全校集会を持ち、自然体で関わり肌で触れ合っています。母親達との昼食会も、子供達の話の聞いて是非参加してみたいという意見をPTAが取り上げて実現したものです。ここから、タイのスタディツアーに参加した親子も生まれ、新聞やテレビで取り上げられたこともあります。今年は地域の大人達も親睦の輪を広げることができればと公民館で大きなおでん鍋をつつきながら舞あり、語りありの時間を過ごしました。子供達を含めて100名以上の参加がありました。

研修生のお話を聴き、草地総主事との話し合いは多くの示唆に富み、また考えさせられることばかりです。その深い問いかけに無力さを感じることも度々です。

PTAでは、未使用のハガキを研修生の方々の為に集めています。又、家庭で一年間かけて、お小遣いをためる子供達もいます。研修生のことを初めて知り、日本語の上手さに驚き、感激された方もいました。こうした交流を通して、確かに小さな芽は育ちつつあると言えます。

しかし、一年に一度の貴重な交流の機会を、一方的なものでなく、協力し合える実り豊かなものとするには、まだしばらくの時間が必要です。他人事でなく、身近な問題から、日本を、アジアを、世界を、そして自分自身を見つめ、PHDと関わり続けていきたいと思っています。

第7回スマトラスタディツアーレポート

今年も村に戻った研修生を訪ねるべく8月16日から26日までインドネシア・スマトラへのスタディツアーが実施されました。メンバーは10才から70才までの計14名で、パシルバルー村とアイルバンギス村に2泊ずつ滞在しました。参加者たちは村での生活を体験したほか、州知事や市長を表敬訪問、それに来年度研修生の選考にも立ち合うことができました。以下参加者からのレポートを抜粋でご紹介します。

自分のためのツアー

田原美穂子(愛知県美浜町 主婦)
村の生活を体験して、蛇口をひねればきれいな水が出て、色々な電化製品に囲まれた日本の生活の、何と無駄の多い贅沢な暮らしか、と考えさせられた。子供の為と思い参加したツアーだが、自分の為であった。明るく、キラキラした瞳のスマトラの子供達を忘れないだろう。

言葉が通じずパニックに

田原大樹(愛知県美浜町 中学生)
村では日本語が通じない。英語もだめだった。子供達が何を言っているのかわからずパニックになった。その時は日本に帰りたと思った。次の日、英語が少しわかる中学生がいたのでうれしかった。彼と色々話をした。

戦争はイヤだと思った

田原祐樹(愛知県美浜町 小学生)
ブキティンギでは、博物館や、日本軍が作らせた地下ごうを見学した。戦争はイヤだと思った。スマトラの人たちは、自由に生活しているようにぼくには見えた。うらやましく思った。

強い家族の結束

原 朋美(福岡県金田町 教員)
ヤニさんのお母さん、肝っ玉母さんだった。私たちに色々話しかけてくれるだけでなく、かたわらで耳を傾けていて、いざという時に、ビシッと意見を述べてくれる。ヤニさんが「一番お母さんがだーい好き!」と言って、お母さんの話をしてくれた。家族がとても強く結束していることを感じた。

初めて乗った馬車

相川宏子(鎌倉市 小学生)
私は、パダンで初めて馬車に乗りました。ツアーの人たちから、「馬車の馬、臭くなかった?」と聞かれた。私が「ぜんぜん」と言うと、「エーッ」と言われた。

皆はその事で乗らなかったんだ。馬が臭かったとしても乗ればいいのに。日本人って、なんでそう考えるのだろうか。私は不思議でたまらなかったです。

一方通行から交流人

相川明子(鎌倉市 主婦)
とかく、見てやろう、聞いてやろうという好奇心から、こちら側から一方的に質問攻めになりがちの中で、今回よかった、と思える交流のひとつは、パシルバルー村の小学校訪問の後、「インドネシアについてどう思いますか」という校長の質問に答えて、我々日本人の一人一人が、感想を述べたことだった。

心からの交流を願う

山本佐一郎(静岡県西伊豆町 漁業研修指導者)
「真心の友情を持って、私の国の漁師を指導して下さい」と4年前に州知事さんから、固い握手と共に依頼された時から、スマトラにのめり込んでいった者です。「真心の友情は、私の大好きな言葉です」と知事さんにも公言しました。そして、市長主催の晩餐会に招待され、これらのことから、国の上層部の人たちが率先して、「心からの交流」を願っていることが、ヒシヒシと感じられました。

純朴さ、隣人愛を失わないで

原 一利(福岡県金田町 造園業)
現在、インドネシア国民の持っている純朴さと隣人愛は、以前日本人も持っていたものです。この心をなくさない教育、現在の日本の教育のように、勉強又勉強と、人間性・情緒を無視した教育が色々な弊害(人に対する思いやりのなさなど)を生み出しているの、こうした事のないように願いたい。

統一と多様性の国

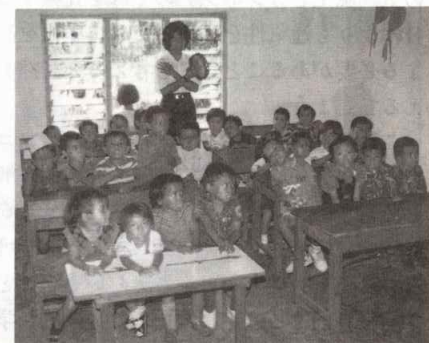
大賀宥護(堺市)
インドネシアの紋章には、「統一と多様性」という言葉が書かれている。国の

指針として真に含蓄のある標語だと感心した。ただその方法は、上からの指導されたデモクラシー(そんなものがあるのかしら)であるとか。

しかし、価値観の多様性がいわれているにもかかわらず、一律の価値観に収斂しようとしている日本にこそ、最もふさわしい標語かもしれない。

日本での学びを生かす

船田かよ子(高砂市 滞家庭主婦)
エニさん、ヤニさんは、一年間日本で保健・衛生・栄養を学んだが、彼女達は村に帰ってどう活かしているかに、私は関心を持っていた。エニさんは帰国して最初に作ったのがトイレだったらしい。また、日本の「おむつ、みたいなものを工夫して作っていた。それまでは赤ちゃんは、タレ流してあったことからみると、衛生的だと感じた。



エニさんは村の幼稚園を再開させました。

価値観の差を感じる

大石 孝(神戸市 公務員)
パシルバルー村で小学校視察後、校長等と意見交換会を開いたが、ツアー参加者の中で最年少の少女が、「村の子供達は写真撮影をねだるが、どうして写真を欲しがらないのか不思議だ」と言ったが、これは言い得て妙である。写真に対する価値観の違いや、カメラを通しての日本人への好奇心などが感じられた。

心に残るツアー

大植久美(洲本市 公務員)
スタディツアーでの出逢いが、これまでの自分の生き方を振り返らせる、意味のある契機になっていることを実感する。村で生活する人たちの姿、自分たちの村に帰ってそれぞれに生きる研修生の姿、そして様々な思いと、それぞれの感性をもって参加されたメンバーの方々の姿を、心の中に大切に残してゆきたいと思っている。

研修生レポート

佳境に入る11期生

フィリピン、タイ、韓国からの短期生と共にぎやかな雰囲気の中、後半期研修に励む11期生。これまでに学んできたことを整理しながら、焦点を絞っています。

自然にやさしい農を学ぶ

スム・ソコムさん(カンボジア)

田中五郎宅・兵庫県山崎農業改良普及所・ハリマ農業協同組合(兵庫・波賀町/山崎町/一宮町)～渡辺省吾宅(兵庫・丹南町)

後半期に入りソコムさんが日本で詳しく学んでおきたいことは養鶏と堆肥。前半期の研修でかなり深く養鶏の経営方法や堆肥のつくり方と施肥方を学んでおり、1年間という短い期間で理解できることは多く望めないとの判断からこの2点に絞ったようです。

例えば、鶏の飼料について各養鶏農家により、またひよこ成鶏で配合物やその割合が異なること、また鶏舎の設計についても日本の気候風土とカンボジアのそれを比較すると日本よりも通気性を高めるために屋根を高くする必要がありますことなどを考えると当然と言えるでしょう。

これは堆肥についても同様ですが、ソコムさんが農業に取組んでいく際の基礎的理解として言うのは、農薬・化学肥料に頼らない、身体的、経済的、更に自然に対しても無理のない農業(有機農業)を考えたいとのこと。来日前はこの点について、専門的に学んだことはなかったそうですが、現場研修の中でその点に理解を示す有機農業者の方々からヒントを得たとの報告を受けました。

簡単に有機農業と言っても、多くの工夫と努力により様々な形態で実践されていることから、これからの研修では養鶏を中心として、鶏フンを堆肥に活用するなど、いかに循環さ



渡辺省吾さんから野菜作りを学ぶソコムさん。

せていくのかをいくつかの研修先の実践を通して比較していくことが課題と言えるでしょう。

のうやくつかわれない、いいです

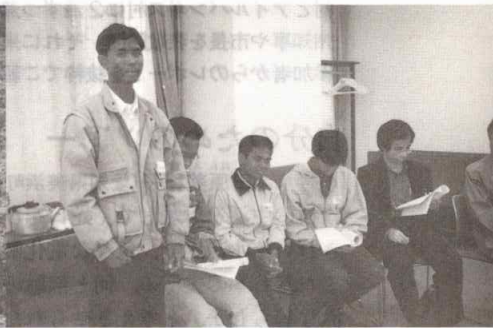
ハップ・ヴァナさん(カンボジア)

大森昌也宅(兵庫・和田山町)

ヴァナさんの後半期研修は、大森さんのお宅でみっちり進められています。大森さんは、和田山町の朝日という過疎の進んだ地区で豚、やぎ、鶏などの動物を飼育しながら、自給自足的な有機農業に取組んでいるユニークなお宅です。

ヴァナさんは、9月から文字通りの長期研修を行って行く中で、多くの発見と理解を得てきました。それは、農薬・化学肥料の身体的悪影響、野菜栽培技術、農村生活者の現金収入獲得のための工夫などが挙げられます。

10月下旬に他の研修生と共に交流会に参加するために一時神戸に戻り、これまでの研修について彼なりの理解を聞いたところ、「おもしろい、のうやくつかわれない、いいです」



10月23日神戸で開催された中間報告会で話すヴァナさん。

と言。聞けばカンボジアのヴァナさんの村では稲作にはほとんど使用しないが、野菜についてはかなり使用しているとのこと。ヴァナさんの体験上からしても、理解が容易だったのではないかと思います。その上で重要なのが、やはり堆肥でしょう。どのように土に栄養を与えていくのか、幸い大森さんのお宅では前述の通り多くの動物がいるためにその排泄物を活用した方法を学ぶことができ、これからの主要な課題のひとつとして捉えています。

また、ヴァナさんも環境は異なるとも農村に生活する者として、「適性技術」としての「炭焼き」の方法を学んでいます。ヴァナさんの村の近くの森林から木を自由に伐採し、炭をつくることのできるかどうかについては、今のところ分かりませんが、現金収入への取り組みとしてこの「炭焼き」が技術的にも実践可能な範囲にあること、帰国後日本の「百姓」がこんな工夫をしていたよと村人に伝えていく中で生活改善のヒントとして有意義な研修となるでしょう。

ヴァナさんのペースでこれからもがんばっていきましょう。



研修先で熱心にメモを取るトゥンティンさん。

実現可能な技術の発見

トゥンティンさん(ビルマ)

平野清通宅/塚本順子宅/石原辰雄宅(岐阜・高山市)～中野宗嗣宅(兵庫・春日町)

毎日元気一杯で研修をこなしているトゥンティンさんは、自然環境、人間の身体を考えた上で村の生活改善に取り組んでいくのならやはり有機・循環農業が最も適しているという考えの上で、具体的な研修テーマに沿って学んでいます。

まず、農作物の生産過程において考えると野菜の栽培技術と堆肥づくりと施肥方が挙げられます。野菜の栽培を考える上で、ヒントになったのが「うね」をつくること。ビルマのトゥンティンさんの村では、これまで「うね」を利用してこなかったことを考えると、「うね」をつくることにより、水はけの問題、また堆肥も無駄なく上手に施すことができるようになるだろうとのこと。またトマトのような「つる」の出る作物については「て(つまり「つる」をからませる棒)を添えることなど、身近なところに実現可能な技術を見つけています。

堆肥については、前半期に学んだ生産者が養鶏家であったために、今度はビルマにも多くいる牛のフンを活用した方法を中野さん(酪農を中心とした有機農業を営む)のお宅で、学びました。堆肥といってもその気候風土により、混ぜる水の量などが異なるためかなりの工夫と知恵が要求されます。ビルマとの比較の中で学んでいます。

また、「近代農業」の現状も学んでいくなかで、換金作物を最優先した単一栽培では天候の変化による作物の被害が大きく、それを防ぐために更に多くの農薬・化学肥料が必要になることを知り、多品種少量を基準とした農業形態が持続的な生活改善のまず第一の方法だとのこと。トゥンティンさんの村でも、換

金の作物が重視され、かなりの面積がそれに利用されているとのこと。この点の理解は重要なポイントではないでしょうか。

啓発の工夫を学ぶ

ムームーさん(ビルマ)

太陽の子保育園(神戸市)～高砂市保健センター/兵庫県高砂保健所(高砂市)～日本キリスト教保育所同盟沖縄地区各保育所/西尾市(沖縄県)

ムームーさんはビルマの村の生活改善を考えた場合、衛生が重要であるという視点から、保育所、保健関係行政機関で学んでいます。

ムームーさんから村の状況を聞くと、栄養上の問題はないことはないが栄養不良により病気になるなどのことは少なく、それよりも、日常生活の上で簡単な手洗い、煮沸した水を飲料用にするなどの点の理解が村人にほとんどないことが、子どもたちの下痢や皮膚病を招いています。その現状から衛生分野の知識とともに、それを母親、父親に対してどのように伝えていくのかについて焦点を当てた後半期研修を実施していきます。

具体的には、簡単なすり傷、きり傷の応急手当、歯のブラッシング、下痢の症状への対応等の方法が挙げられます。

ムームーさんが熱心に取り組んでいるのは、口腔衛生(歯みがき)。そのブラッシングの仕方から、虫歯の進んでいく過程までかなり詳しく学んでいます。ビルマの村においても、砂糖菓子が多く出回るようになり、一方で歯をみがく習慣が徹底されていないこと、また経済上の負担もかからないことを考えると、まず取り組むべき点とも言えるでしょう。

啓発の方法についての研修では、高砂市保健センターにおける研修中に、保健婦さんの協力のもと、食事の手洗い、飲料水の煮沸、歯みがきについてポスターを作成しました(写真)。口頭での説明だけではなかなか伝わらないことは多くあります。このように年齢を問わず、視覚に訴えることができるような材料(例:紙しばい)について今後更に学んでいく必要があるでしょう。

上記研修内容とは話が異なりますが、沖縄滞在中のこと、「ひめゆりの塔」を見学する機会がありました。お話は少々難しかったようですが、戦争の悲惨さ、無意味さを実感したとの報告を受けました。



ムームーさんの作った啓発用紙芝居。

産消提携を学ぶ

チャラムサック・カッティヤさん

(タイ)

橋本慎司宅(兵庫・市島町)～原重男宅(丹南町)～研修生報告会(神戸市)～淡路島モンキーセンター(洲本市)～渋谷富喜男宅(神戸市)～吉田吉彦宅(氷上町)～中野宗嗣宅(春日町)～一色富士夫宅(市島町)～飛田雄一氏、信長たか子氏(神戸市)

タイ北部のボッケオ村(5期生ブラカシット・コマさん、4期生ウィラット・ソンセンさんの村)における有機農業の実践と、チェンマイ市での消費者の啓発、組織化に取り組んでいくことを目的に、日

本の有機農業生産者と産消提携運動を進める消費者の方々からそれぞれの実践を学びました。



産消提携の実践を見学するチャラムサックさん(右から2番目)と韓国からの研修生。

日本においても、継続的な有機農業に対する理解と支援が得られにくいことを

考えると、これからがスタートのタイでの取組みはかなりの困難が予想されます。研修開始当初は、チャラムサックさん自身の考えもあってか、なかなかスムーズに研修も進みませんでした。後半期に入るとペースも上がり、充実した研修を実施しました。

原さんのお宅での研修中、丹南町有機農業実践会の消費者との様々なイベントや交流に参加し、その関係や提携の実践を生産者と消費者両者の立場から観察することができ、タイでの取組みのヒントとして多くを学ぶことができました。

第4回日韓農民交流

これまで、交流を続けてきた韓国の有機農業生産者グループ「正農会」と「農民会」のメンバー交流が行われました。次号で詳しい内容を。

メンバー紹介(敬称略)

忠清南道洪城郡より(正農会)

KIM BOR KWAN
金 福寛、野菜・通訳

OH YOUNG NAM
呉 英南、養豚

HWANG CHANG IK
黄 昌益、椎茸

HAN MIN JUN
韓 敏傳、朝鮮牛

慶尚南道居昌郡より(農民会)

BYUN HYGIL
卞 熙吉、農業

YANG DONG GUK
梁 東國、農業



交流日程

研修生報告会(神戸市)～淡路島モンキーセンター(兵庫・洲本市)～渋谷富喜男宅(神戸市)～吉田吉彦宅(氷上町)～中野宗嗣宅(春日町)～一色富士夫宅(市島町)～日本キリスト教団兵庫教区・神戸学生青年センター交流会(加西市)～飯沼二郎氏～旅路の里(大阪・西成区)～薄田昇氏～在日本韓国YMCA関西(大阪・東成区)～保田茂氏、信長たか子氏講義(神戸市)

多様なひとつの国インド

職員海外研修
レポート2

15週間の英国・欧州研修に続いてインドに来ています。今日で丁度50日目です。英国で世話になったインド人の先生の紹介でインド各地の地域開発（コミュニティ・ディベロップメント）、社会活動（ソーシャル・ワーク）に関わる組織、人々を訪ねています。カルカッタ、マドラス、ボンベイといった大都会から人口200人の村まで様々なインドを体験しています。交通機関のストライキ、地震、交通事故とアクシデントもいろいろ。

お伝えしたいことは山とありますが、まず大前提として「インドだけでひとつの世界」ということです。変化に富んだ気候の広い国土に植民地であったことを含む歴史、多くの人々、言葉、宗教、文化そして考え。ひとつの州がひとつの国みたいなものです。その中にある多くの社会問題、極めて、豊かな人がいる一方で、人間として生きていくのに最低必要な条件が満たされていない人々が大半です。カースト・少数民族・性別・心身の障害・仕事の種類ゆえの生活困難、不十分な収入・就業機会・生活環境・教育・保健衛生・医療、工業化、大規模開発による環境破壊等々。しかしその克服に取り組む人々も数多く存在します。そのいくつかを訪ねることにより、多くのことを学んでいます。

多くの活動に、共通する点は、施す・恵むというやり方でなく、まずその困難に面している人々の目覚め(awareness)とその人々自身による問題解決の取り組みへの参加(participation)を基本としていることです。各NGOはこの目覚めと

参加の過程を側面から支えています。NGOが中心ではなく、また指図するのではなく、村・地域の中に解決への動きの核となる人を育て、問題の当事者が取組んでいく動きの支援を役割とします。また個々のNGOが対象・目標をはっきり絞り、足らずは他のNGOとの協力連携で補うところも特徴です。さらにその活動の根底にガンジーの思想をおくところも多く見られました。

この状況の中で私たちから何か援助できることもあるでしょう。しかしそれ以前に日本とインドの関係、互いの影響の内容・程度を知り、もしそれが好ましくないものであるのなら、それを日本の中から止めることが先決だと思います。ここ最近、インド政府の経済政策の転換(その背後に世銀とIMFの影響あり)で他国からの進出がしやすくなったことにより、日本も関係を深めています。車、バイク、電気製品等、庶民の暮らしには縁遠いものがありますが、物欲、現金経済化をおおいます。日本に送られる鉄鉱石の採掘現場では汚水問題が起こっていました。ゴア州では日本資本によるゴルフ場開発・リゾートタウン計画への反対デモに出くわしました。カルナタカ州では日本企業の進出に伴う日本人町の建設計画があり、予定地の農民の立退き及び建設後の周囲への悪影響からこれも反対運動が起こっています。ある労働者組織の代表は、日本は1投資して、4利益を上げているとデータを示し説明してくれました。

異なる国との新しい関係が一部の人の

利益に留まり、他の多くの人々の迷惑になるとすれば考え直すべきです。特定の人同士の閉ざされた関係だけでなく、もうひとつの(alternative)まさに草の根の人々同士のつながりを作っていく必要を感じています。このつながりから互いに情報を得、学び、刺激を受け、相手方に働きかける以前に互いにそれぞれの住む現場(地域)の生活に根ざした取組みに生かす。単にインドの人々を対象としてだけでなく、世界に向けて、日本の中



カルナタカ州の南ラジブ・ガンジー国立公園の中に住む少数民族のガッディハディ村の人々。彼らは今公園外への立退きを求められている。

のそれぞれの地域(コミュニティ)に属する一員としての私たち自身のコミュニティ・ディベロップメントへは国際協力への役割だと思います。日本の経済発展—これが私たちの物質的豊かさを支えている—は海外との密接なつながりの上に成り立っていることを再確認しなければなりません。日本人の中にも、共に生きていくための目覚めと参加が求められていることに気付かされるインドの滞在です。

本研修は立正佼成会NGO人材育成支援計画のご支援をいただいています。

カルカッタにて/主事 藤野達也

考慮に入れていることに感心し、特に生産者と消費者のつながりの深さは諸問題解決の良策となるだろうと語ってくれた。これからの展望として本国へ帰った後には、日本で学んだ事をサフルディのメンバーと分かち合い、豆腐も有機農業の大豆から作りたそうである。最後に、日本の食生活について「日本人は最近冷凍食品やインスタント食品を多く食べる傾向にあるが、これらの食品が含む添加物は相当な量である。これからは昔に戻って、家で調理してから食べて欲しい。また日本の産物を食べるのは日本人だけではないので、農業を使わない有機農業がもっと広がることを祈っています」と語っていた。

柳口未来(研修通訳/神戸市 学生)

枝打ちで気分爽快。第3回林業体験合宿レポート

今年で3回目となる林業体験合宿が9月23日から26日まで大山振興会、篠山林業事務所、ウータン・森と生活を考える会の協力を得て行われました。昼は林業作業、夜は林業の事や熱帯林問題についての学習会を行い、日本人の生活とアジアとの関わりなどについて考えました。

林業体験・熱帯林学習会に参加して

土山敏宏(神戸市 中学生)

この会に参加して、地元の林業にたずさわる方々や、いろいろな考えを持った方たちの話が聞けて良かった。「熱帯林伐採はいけない」とは言っても、それを消費する日本のぼくたちに第一の責任があることをあらためて知らされた。「伐採反対」を堂々と言えらるくらい、ぼく自身、ふだんから気をつけて、生活しようと思う。

作業では、下草刈り、枝打ち、間伐(間引き)などをさせてもらった。間伐では、樹齢20年ぐらいの杉を切った。ぼくよりも長く生きているような木を切り倒すのは、あまり、いい気持ちではなかった。

林を守る人々に思いを

松波めぐみ(川西市 会社員)

林に足を踏み入れた途端、初めてなのに懐かしさがこみあげた。何故ならオリエンテーリング(8年来の趣味)でよく訪れるような林、そのものだったから。

枝打ちは気分爽快。間伐では木が倒れる時の静けさ・荘厳さに感動した。作業の合間に伺った地元の方々のお話には、林を守り育てて来た年月が年輪のように刻み込まれていて、魅力的だった。

夢中で過ぎた「体験」と盛り沢山の勉強会は、カルチャーショックをも与えてくれた。木を植える人々と使う人がバラバラに存在する現代。せめて想像力を働かせ、この木はどこから来たの?と聞きたい。林を守る人々に思いを馳せたい。

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1993年8月	111件	707,066円
9月	81件	11,459,790円
10月	108件	1,919,271円
300件		14,086,127円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

〈自動車総連よりひき続きのご支援〉

継続してのご支援も4年目となった自動車総連からの福祉カンパ特別寄贈を他団体とともに9月27日東京でいただきました。東日本研修旅行で本館と本田、いすゞの各労連に伺う予定です。労組の皆さんに研修生に出会っていただけると、楽しみです。

〈事業報告書:追加のお願い〉

会員の皆様へ9月にお送りした「92年度事業報告書」に一部抜けていた所がありました。お手数ですが以下ご追加下さるようお願いいたします。お詫びして訂正いたします。

財団法人PHD協会 理事
追加: 崎山昌廣 神戸新聞社論説顧問

〈西日本研修旅行に参加を〉

平和・社会学習と地域の方々との交流を目的とする西日本研修旅行を下記のコースで実施します。1~2名の同行(部分)可能。お問い合わせ下さい。コース決定後、対象地域の皆様にご案内いたします。

日程 '94年1月下旬~2月上旬
予定コース 大分~北九州~福岡~水俣
~長崎~広島~島根~鳥取
~神戸(車で参ります)
訪問者 第11期研修生4名、職員

〈ロータスクーボンで研修生用カメラ〉

いつも皆様からお送りいただいておりますロータスクーボン・グリーンスタンプを、ようやくボランティア総動員で整理いたしましたところ、研修生用としてラジカセ、カメラ、事務所用の掃除機に交換することが出来ました。

本当にありがたく早速研修生が使っており、心よりお礼申し上げます。今後共ご協力のほど、よろしく願いいたします。



ソディ 戸隠の旅

竹垣真佐美
(神戸市 主婦)

カレンの草木染の体験をということと企画したこのツアー、一口に言っても楽しかった。

朝6時に長野に着いた私達一行はバスで約1時間市内を眼下に見下ろせる位登って行って、着いた所がログハウス。早速草木を集め、まき割り、火起こしとみるみる内に準備ができ、目の前であの独特の草木の色に染め上がった。感動だった。身につけてるジーンズを釜の中に入れる人も...

夜のミーティングでは老若男女、いろんな意見が飛びかった。PHDの中のソディの方向性、カレンの村とかかわりは、何が望ましいのか。少なくとも最初布を持ち帰った時とは情勢が変わってきている。草木染の布が緑でできたソディ、興味ある人達が集まって染めをしたり、又来年もツアーを計画したり、そしてその中から出た意見を年末のスタディツアーで現地の人達と交換し、カレンの人達の意志、今後を聞くことによって、これからのソディの方向を決められたらと、私は思います。

昔の人は「同じ釜の飯を食べて」と言うけれど、事務所までミーティングするよりもツアーで共に寝て、共に行動した後のミーティングの方が話す人の目が違います。

結婚して20数年、家を留守にしたことのない私が3日間も主婦業をほうり出し1人でツアーに参加しましたが、その3日間とても有意義なものであり、心のリフレッシュができた旅でした。

草木染を初心者私達に手とり足とり教えて下さった先生、夜、蛍を見に連れてって下さったロッジのお父さんに感謝。

〈SHARING(シェアリング)というグループが誕生しました〉

PHDの研修生との交流や学習会等を通して、ともに分かちあおうとする人たちの輪を広げていきたい、と思います。開発教育についても学んでいく予定です。

各地で、私たちと同じ願いを持っていらっしゃる方々とのネットワークもできれば、と願っています。担当は会員の秋山範子さん。お問い合わせは、PHD協会まで。

豆腐作りに強い関心

オリンピア・トレド(ヨリー)さん (フィリピン)

尾崎食品(神戸市)~薬害・医療被害情報センター(神戸市)~鳥取県根雨保健所(日野郡)~淡路島モンキーセンター(洲本市)~信長たか子氏(神戸市)~明石協同歯科(明石市)~市川町立瀬加保育所(兵庫・市川町)

ヘルスワーカーとしてヨリーさんは、今回の研修でより深く大きな枠組みを学ぶことができたようである。尾崎食品で豆腐作りを学んだが、豆腐の調理も楽しかったそうである。豆腐作りは初めてで、最初みた時は簡単にみえて、これならすぐ作れると思ったそうであるが、微かな加減がわからず、失敗を繰り返し、今で



中橋所長より話を聞くヨリーさん(中央) /淡路島モンキーセンターにて

は見事な豆腐を作ることができるようになった。モンキーセンターでは猿の姿を見て人間への影響を懸念していた。産消提携運動については生産者を助けるためだけでなく、それが消費者の健康までも

○月×日のPHD協会

総主事 草地 この夏は小分けでと言いつつ合計88日間の旅となる。去年は帰国第一声が「南太平洋ベースで事務所仕事は4時終了あとは家庭菜園ぞ」とのたまっていたが、いえいえ戻るなり仕事の山で東奔西走。

主任主事 藤野 前号とは所が変わりインドへ。現地NGOの活動現場を巡業中、列車のストライキや大地震に出くわすがそれでも何とか無事とのこと。細いカラダに広いココロを携え、熱風に吹かれて今日もゆく。

主事補 小松 文句タレの運営委員となったワン・ワールド・フェスティバルも、初年を無事終了。ボランティアも多く参加してくれ雨も何のその楽しい一日になりました。満員御礼。来年はタダの参加者になりたい。

主事補 吉岡 夏は短期生オリンピックさんのケアで大忙し。研修生に人数が増えるにつれ多忙となる日々は、食事が一度になることも。国内外の出張は三度のメシが当たると、今から東日本研修旅行が楽しみと舌をペロリ。

主事補 渡辺 スマトラツアーに参加。今回総主事より直々の指導をいただくも、時には

ゲンコツ混じりの嵐もあったとか。参加者、研修生に守られるボク。釣り好きにはこたえられないインド洋でした。

囑託 柳下 手作業の業務をOA化しようと張り切ったある日、叱りつける声を聞いて周りの者が皆びっくり。この人のものとは思えない罵声に相手は誰かと見ればワープロさん。お嬢、おちついてネ。

今年はNGO大学に多くのボランティアが参加。外での学び、交流でさらに、パワーアップを期待しています。



編集後記

私がPHD協会に関わり出して、早くも6年が経過しました。主にこのレターの編集をしています。事務所では老若男女、様々な

職業の人が出入りして、色々と考えさせられることが多いです。

さて、このレターも号を重ねて、来年3月で50号となります。会員の方々にお知らせしたいことが多いものの紙面に限りがあり、編集に関わっているボランティアとしては、歯がゆいところがあります。編集ボランティアをしていて残念なことは、読者の方々からの

反応が少ないことです。励ましのお手紙は勿論、お叱りのお手紙もお待ちしています。また近く紙面構成、内容の刷新を考えていますが、読者の方々から、こういったことを掲載して欲しい等のアイデアがあれば編集部宛に送っていただければうれしいです。

〈編集メンバー〉

得原輝美、藤木寿乃、柿原登志夫、岡本敦子

カキG

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。